
ワンサイド・デイズ

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンサイド・デイズ

【Nコード】

N0982G

【作者名】

久芳

【あらすじ】

結城探偵事務所の探偵、真琴。ラクは彼女の助手をしている。今日の日以来は、失踪した追川家の娘を探してほしいというものだった。

「アタシ、なにやってんだろ」

「はあ、とひとつ、盛大なため息が隣から聞こえた。

それがいつものことだと知っているぼくは、瞳を動かして彼女を見る。身長差があるので顔はよく見えないけど、表情がいらだっているであろうことは、流れてくる雰囲気でもわかってしまう。

「本来ならアタシはこんなところでこんなことしないで、敏腕とうたわれてチャホヤされてるはずなのに……」

彼女は誰にも返事を求めず、小声でぶつぶつ言っている。仕事に對するやる気はまったく感じられないけど、『一人で歩いてたら怪しまれるからついてこい』と言われたぼくは、彼女に口出しすることとはできない。何も言わずに黙って歩いて、もう何時間たっただろう。

昼下がりの住宅街は、さすが日曜なだけあって、人通りもいつもより多い。友達を遊びに誘いに来た子がいたり、ホースで虹を作りながら車を洗っているお父さんがいたり。平日と休日との違いがはつきりと見てとれた。

ぼくがいるからなのか、真琴まことはこの風景の中でも浮いていない。視線だけは感じるものの、決して不審者を見るようなものではない。「殺人事件でも起きないかな……」

不謹慎なことを平気で口にする真琴と、ぼく。カップルには見えなくとも、とても私立探偵が歩いているようには見えないはずだ。

結城探偵事務所の所長兼探偵の真琴は、まだ二十代だというのに、着古したジャージにスニーカーという部屋着と変わらない格好で出歩いても恥ずかしくないらしい。のびっぴなしの髪はひとつに高く結って、キャップを目深にかぶって顔を隠していた。

本人はローズピンクだと言いはるけど、周囲にはいちごみくると言われている髪からは、シャンプーのハーブの香りに汗のにおいが混じっている。太陽の陽射しも暑さも苦手な真琴は人の視線も嫌いで、子供が指さすたびに舌打ちをしていた。

「何で依頼がいつも浮気調査だの家出捜索だったりするのよ……！」
感情があふれそうになって、彼女はこぶしを握る。ぼくは危険を感じ、八つ当たりされない程度に身体を離れた。

今回の依頼は、いつもと変わらない。行方不明になった追川家おいかわの一人娘、マチを探してほしいというものだった。捜索に適しているのは夜間だろうとふんで真琴一人が毎日探していたけど、どうにも情報を得られず、こうして仕事時間が日中にもなった。だからぼくがかりだされるようになったのだ。

真琴はいつもこういう依頼は断るのだけど、そろそろ事務所兼アパートの家賃が危なくなってきたので、しぶしぶ引き受けたのだ。た。

「アタシに胸躍る殺人事件を！」
それは漫画とテレビの見すぎ。

真琴は基本、朝食をとらない。その状態で捜索を始めるものだから、お腹がすき、よけいイライラしているのだ。

「 帰る 」

彼女の決断に迷いはなかった。

踵をつかってくるりとまわった真琴は、颯爽と事務所への道を戻り始める。そしてふいに立ち止まり、思い出したようにぼくを見た。
「遊んでから帰るか？」

ぼくは朝、戸棚をあさってごはんを食べたので、お腹はすいていないし体力もありあまっていた。

「晩飯までには帰っておいでよ、ラク」

頭を乱暴に撫でられ、ぼくはこくりとうなずいた。

「お前はホント、無口なのな」

真琴の苦笑を背に、ぼくは彼女と反対の方向へとかけていった。

真琴がぼくをいつまでも子ども扱いするものだから、ちょっと腹がたっていた。

のどがかわいた。

近くの公園へとやってきたぼくは、水のみ場でのどを潤す。アスファルトの放射熱ではて気味だったぼくは、ついでに顔もぬらした。満足して顔を上げると、ボール遊びをしていた子たちが、じっとぼくのことを見ていた。そして目が合うとそらされる。ぼくも真琴と同様、人目を引く容姿をしているのだ。

ぼくは金髪なのだ。真琴のように染めてはいない、生まれつきのブロンドだった。

ベンチに座って身体を休めれば、ぼくに興味津々な子達が微妙な間隔を保ってくる。ぼくは子供たちに好かれるようで、歩いていると後をつけられることがしばしばあった。

ベンチのすぐ隣にはぼくを日差しから守るように枝を広げる桜の木があつて、こずえから降りそそぐ光は風にふかれてゆらゆらと回っている。

悪意のない睡魔が、ぼくのまぶたに魔法をかけてくる。

だからぼくは、隣に来た誰かを子供たちだと思って、寝たふりをしていた。

はじめはただぼくを見下ろしていた誰かは、わずかにあいていたベンチに腰を下ろした。ぼくの顔をまじまじと見つめる、射るような視線がどこか真琴に似ていて、ずいぶん眼力のある人だな、とぼくは思う。

「ねえ」

もう、知らんぷりはできないだろう。観念して、ぼくは寝返りをうつ。声を聞いた感じ、これは女の子の声だ。でもぼくには、声をかけられる理由がまったく思い浮かばない。

薄目を開けて、数回まばたき。目を開き彼女の顔を見て、目があつたかと思うと、ぼくはその瞳に吸い込まれていた。

まるく、大きな瞳だった。黒目がちとかそういうのではなく、白目がほとんどないのだ。特別瞳が大きいわけではない。むしろ目が小さいからそう見えるのだろうか。短くそろえた髪がまた、瞳と同じで黒い。

眦があがつてきつそうな印象をあたえるけど、きりりと座った姿は、育ちのよさを意図せずともあらわしていた。

真琴の隣でのぞきこんだ写真と、まさしくそのとおり。

「あなた、あの探偵さんの助手でしょ？」

彼女は、追川マチだった。

「結城探偵事務所って、私たちの中じゃ結構有名なのよ」

眠りを邪魔されてだるい身体を起こすぼくを尻目に、マチは言う。彼女が加わったことで子供たちの視線が倍になったような気がする

けど、マチはそれを完全に無視していた。

ぼくと彼女が並んで座ると、つくりの違いが際立つ。血筋とか、性別の違いとか、そういうのを強く感じさせる。見た目が非常にアンバランスで、ぼくとマチが一緒にベンチに座る理由なんて、傍観者はおるかぼくにもわからなかった。

「オカアサンたちに頼まれて、私を探してるの？」

オカアサン、と、マチはその言葉だけをまるで自分の国の言葉ではないように使う。ぼくはその意図を察し、気づかれないよう心のうちで嘆息した。

「追川さん、心配してるよ。帰ろう？」

「そんな気分じゃないもの」

遠まわしな否定なのは、本当は家が恋しいから。けれどぼくは、無理に連れて行くとは思わない。マチのような家出少女は、ちゃんと本人が納得しないと、また家出するとわかっているからだ。

「気分になったら帰る？」

「……うん」

「じゃあすこし話そうか」

マチは本当は、いまずぐにでも家に帰りたいのだ。

雰囲気や話しかたは大人びているけど、親が恋しい年頃だろう。彼女の心はいま、さまざまな葛藤を繰り広げている。そしてぼくが探していると知りながら、逃げずに話しかけたのは、なんとか自分の心に区切りをつけたかったからだろう。

捜していた追川マチが今、目の前にいる。とても簡単な仕事だけど、難しい仕事でもあった。真琴と見た映画のように大きな事件ではないけど、気分はネゴシエーターだ。

「今まで、どこで生活してたの？」

「友達のところを転々として、相談にのってもらってたの。あまり、参考にはならなかったけど……」

痩せた頬が目立つ。家出している間に多少食事を取らなかったとしても、これほどやせることはないはずだ。これはきっと、精神的

なものに違いない。

「なんで参考にならなかったの？」

「みんな同じこと言うから」

「なんて？」

「しかたない、って……」

マチの語尾が、かすかながら震えた。

それを気づかれまいと彼女は空咳をするのだけど、感情が抑えられないらしい。見る間に目に涙がたまり、まばたきをするとまつげが水を吸って重そうに垂れてしまう。

「なんで私、オカアサンたちの子供じゃないんだろう……」

絞り出すようなかすれ声が、彼女の精一杯だったのだろう。口を開けば嗚咽がもれて、はやく涙を止めようと唇をかんでしまう。

そんなマチに顔を寄せ、ぼくは涙をぺろりとなめた。

突然の行動に驚いて、彼女は白目が見えるほど目をまんまるにする。声をかけるよりも、確実に注意を引くことができた。

口角を上げて、ぼくは微笑みをつくってみる。そして彼女の耳にささやいた。

「ためこまないで出したほうがいいよ。ぼくは悲しいとき、真琴に心配かけたくないから、ひとりになったときに大泣きするんだ。きみは今ひとりじゃないけど、ぼくに泣き顔見られたって平気でしょ？」

「……今ので、ひっこんじゃった」

それは彼女の強がりだ。でもマチがそう言った以上、ぼくは何も言わない。彼女も彼女で、本当に涙が引いてきたらしい。

「……ラクにも」

「ぼくにも？」

目じりに残る涙をぬぐいながら、マチはぼくに問うた。

「どうしても越えられないもの、あるよね」

それに答えるため、ぼくはすこしだけ、自分の記憶の糸をたぐりよせることにした。

ぼくと真琴は、親子にも姉弟にも見られたことがない。血がつながっていないのは見た目でわかる。かといって、カップルにも見えることもなかった。

今から五年とちょっと前。ぼくは雨の降りしきる街で、行くあてもなく座り込んでいた。身よりもなく、日々食べ物と寝る場所に困り、盗みを働いて泥だらけになってどうにか命をつないでいた。

その日はもう何日も食事をしていなくて、栄養不足で満足に動くこともできなかった。連日続いた雨で風邪をひいてしまったらしく、熱でうまく動けなかった。日が沈んで空気が冷えはじめ、すくめた身体は肋骨が浮いていた。粗大ごみ置き場に隠れたのは、少しでも雨風をしのげるところを選んだからだだった。

死ぬかもしれない。頭の中がそれでいっばいになったのを今でもよく覚えている。燃えるごみのところに隠れれば多少食べ物にあり

つけたかもしれないけど、下手に生ごみに手を出せば一貫の終わりだった。

腐ったものを食べて吐瀉物と汚物まみれで死ぬのなら、飢え死にしたほうがいい。そこまで考えて、早く寝ようと目を伏せたぼくの前に、彼女は現れた。

『さすがに、この子じゃないだろうな』

そのときもきつと、依頼で誰かを探していたのだらう。目当てと違うことに落胆したようだけど、彼女はぼくのもとから去ろうとしなかった。

『お前、大丈夫か？』

骨と皮ばかりのぼくの腕を取り、彼女は足場の安定しないゴミ捨て場を片付け始める。ぼくと同じような人たちには目もくれず、服が汚れるのもかまわずにぼくを抱き上げた。

当時のぼくは、見た目以上に軽かったと思う。彼女の足取りが速かったのは、単に荷物が小さかっただけではなかったのだらう。

こうしてぼくは、結城探偵事務所の扉をくぐることになったのだ。真琴の手厚い看病のおかげで次第に回復していったぼく。身元も名前もわからないぼくのことを彼女は最初熱心に調べていたが、半年もたつころにはすっかりあきらめていた。

『お前、うちに住むか？』

真琴がぼくにそう持ちかけたのは、日曜日の夕方だったということとを記憶している。

ソファで横になりテレビを見る真琴に、ベランダの窓から差し込む夕日があたっていた。靴下をはかない足はフローリングの上をぶらつき、ぬるくなったビールはガラステーブルの上で放置されている。隣に座るぼくがきよとんとしているのを見て、彼女は不安そうに首をかしげた。

『……………いや？』

あわてて、ぼくは首を横にふった。真琴は、それを見て、微笑みながら背中を叩いてくる。

『じゃあ、今日からお前のことラクって呼ぶから』

ラク。そのおかしな名前に、ぼくは齒切れの悪さを感じた。

『ラクだけじゃないってば。はじめて会ったときからお前、生きるのがつまらなそうな顔してたでしょ？ だから楽しく生きれますよ』

うにっていう意味で、楽太郎』

見た目に合わない名前だけどね、と、彼女は苦笑交じりに付け足した。

『いや？』

ぼくはまた、首をふる。昔の名前はとくに捨てていた。ずっとお前と呼ばれていたから、名前なんてもらえと思わなかった。楽太郎と名づけられたということは、もうこの事務所から追い出されることはなくなったということだ。

嬉しい出来事になれていなかったぼくは、うまく喜ばず、ただ座り込んでいた。

この名前をもらってから、ぼくは真琴と実さまさまな経験をともにした。もちろん悲しいことやつらいこともあったけど、楽しいことはその倍以上あったと思う。

たまたまテレビで笑点がはいっていたから、楽太郎とつけられたわけではないことを、ぼくは密かに願っている。

「ラクって変な名前だと思ったけど、結城さんがつけたのね」
「ぼくは気に入ってるよ」

思わずむっとした口調で言うと、マチは苦笑しながら肩をすくめた。

ベンチのふちに手をつき、マチはこちらを見る。目が少し赤いけど、泣き出しそうな気配はなかった。

「結城さんの噂、いろいろ聞くよ。探される立場としては迷惑だけど、腕もいいし、性格もちよっと変わってるけど優しいよね。綺麗だし……私も生まれ変わったらああいう人になりたいな」

目をそらして、もう一度ちらり。真琴をほめてぼくが喜ぶと思ったのだろうか。悔しいけど、そのとおりだ。

そして彼女は目で語る。ラクにも私の気持ちがわかるでしょう、と。

だからぼくは、それにうなずきで答えた。

「ぼくらの力じゃ、どうしようもできないことだよ」

マチが追川家の本物の娘になれないことも。

ぼくが真琴に抱いている気持ちも。

はじめは、命の恩人である真琴は母のようだった。幼いぼくを一人で養ってくれた。まだ若いのに生活力はあるらしく、食べるものに困ることは一度もなかった。本人はああいう性格だけど、仕事の腕はとてもいいのだ。

ぼくが大きくなると、真琴はぼくにも手伝いをさせるようになった。喜ぶ真琴が見たくて、ぼくはこうして一人でも仕事をするのだ。はじめのころは、ただの恩返しのもりだった。でも時がたつにつれ、母のようだった真琴は姉のようになり、ぼくの心は彼女を家族とは別のものとしてとらえるようになっていた。もちろん真琴に

とってぼくは弟であり居候であり助手である。それ以上の気持ちを持つことはないと言言できる。

真琴の左手の薬指には、指輪がはめられている。本当は苗字も結城ではない。

ぼくは、真琴に気持ちを伝えることができない。

いや、伝えようと思えば、できるだろう。寝起きの彼女を押し倒したこともあるし、同じ布団で寝たこともある。昔はキスだったくさんした。

でも、真琴は僕の想いを受け止めてくれることはない。ぼくは永遠に片恋のままなのだ。

「だから、きみの気持ちは、わかってるつもり。ぼくはたしかにきみみたいな思いはしていないけど、逆にきみもぼくみたいな思いはしていないよね」

それで相殺ということには、ならないだろう。それでも、多少なり同族意識というものはできたと思う。

「まあ、ね……」

言葉を濁し、マチはまた下を向いてしまう。隣に座っているのだから当たり前だけど、ぼくはずっと彼女の横顔を見ることになる。まじまじと見つめ、彼女の横顔はなんて綺麗なのだろうと思っていた。

「……オカアサンのお腹、見た？」

「お腹？」

言われて、依頼に来た追川夫人を思い出してみる。顔も性格もマチには似ていない、けれど凛とした立ち姿と胸までとどく真っ黒な髪が印象的な美しい人だった。

顔には目がいったけど、思わず見てしまうような特徴的な腹部はしていないかつたはずだ。

「まあ、まだ三ヶ月だし、見た目じゃわからないわ」

「妊娠してるの？」

「そうよ」

それはとてもおめでたいと思ったけど、ぼくは口に出さなかった。本来ならとても喜ぶべきことだ。追川夫人は不妊に悩んでいて、自分の子供はあきらめてマチを引き取り暮しはじめたのだ。あの広い庭付き一軒家に家族が増えたら、もっと明るくなると思う。けれど。

「マチは、嬉しくない？」

もしかしたら彼女は不安なのではないだろうか。血がつかった子供ができて、自分に対する愛情が薄れていったら、と、考えているのかもしれない。

「嬉しいわよ、すごく」

ぼくの推理は見事に外れた。

「家族が増えるのはとても嬉しい」

「じゃあ家出の原因は？」

「新しい子供」

矛盾している。そう言おうとしたぼくの口を、彼女の言葉がさえぎる。

「私、何もしてあげられないんだもの。親にだってそうなのに、子供が生まれたりしたらもっと自分の無力さに嫌気がさすと思う」

マチは、ぼくに何か言っただけらしい。目で信号を送ってくるけど、ぼくはとっさに言葉が出てこない。

ぼくだって、いつもそう思っているのだ。ただ、その思いを言葉で表現できない。よく考えて、自信なさげに訊くしかなかった。

「……悔しい？」

こくりと首が動く。唇をきつと引き締め、彼女は地面を睨むように見、かぶりをふった。

「どうして私はあの家の子に生まれてこなかったんだろって、いっつも思う」

本物の親子にはなれない。この差は、とても大きい。

「だからもう、この家から出ようって飛び出したのはいいんだけど、私、ずっと家のことばかり考えてるんだよね」

それでも、心はつながっている。ぼくはマチを見てそう思うのだけど、やはり彼女には越えられない壁がある。

ぼくにも、越えられないものがある。

「私、なに不自由ない生活させてもらってたっていうことを実感したわ。ごはんは食べられない寝るところはない。保護されるのは嫌だったからずっと逃げてたけど、正直もうこんな生活したくない」

昔のぼくと、同じ生活をしている。その苦労が骨の髄までしみこんでいるぼくは、マチの言葉に大きくうなずいた。

「私、愛されてた。だから今、お母さんたちに心配かけてるのがとてもばかだと思うの」

自分が求める愛を与えてもらうことができる。正直、ぼくはマチがうらやましかった。

ぼくがほしい愛はマチとは別のものだ。マチのもらっている愛は、ぼくも少なからずもらっている。ただ、ぼくがほしい真琴の愛は、ぼくではない別の人に向けられている。

そう思うと心が沈むので、ぼくはそれを息で吐き出した。

「じゃあ、家に帰る？」

「うーん……」

帰るとなると、話は別らしい。マチは悩むそぶりを見せ、しきり

に瞳を泳がせた。

「帰りたいから、声をかけたんでしょ？」

そうじゃなかったら、探偵助手とわかっているぼくに近づくわけがない。帰りたいけど帰るきっかけがつかめなくて、ぼくに声をかけたのではないだろうか。

「ラクと話してみたかったの。もう、相談できる人にはしつくしちやったから……ラクはその気持ち、どうするの？」

彼女は、どうやって割り切るかと聞いている。つまり、ぼくがどうやって真琴のことをあきらめるか知りたいらしい。

「どうもしない。ぼくは、ずっと真琴を好きでいるよ」

「つらくない？」

「つらいよ」

でも、割り切ることのほうがずっとつらい。

「ぼくが真琴を好きでいても、真琴は困らないでしょ？ だからぼくは、ずっとずっと、真琴を好きでいるよ」

この気持ちは、墓の中まで持っていくつもりでいる。許される限り彼女といょう。報われない恋でも、ぼくは一生、真琴を想い続ける。そう決めたのは、ずいぶん前のことだ。

「マチの想いは、ちゃんと受け止めてもらってるよ。両想いなんだから、ぼくはそれがとてもうらやましい」

思ったことを、正直に伝える。相手の信頼を得るためには自分の本音を伝えるのが一番。けれどこれは意図せずやったことだ。

マチの反応がないので、ぼくはにこりと笑ってみる。彼女はうなづくものの、まだもやもやが残るのか、行動に移そうとしない。

「帰りたいくない？」

「帰りたいけど、怒られるのが怖い」

ぼくは今までで、一番自然に笑ったと思う。

「怒りなんてしないさ。心配してたよ」

そしてぼくは腰をあげ、ベンチから降りた。

「マチ！」

ぼくらの姿を見るなり、追川夫人は大粒の涙を流した。マチを怒りもしなかった。抱きしめて、無事を安堵して泣いていた。

いつしか日は暮れ、帰宅したご主人がぼくを見てすぐに真琴に連絡してくれた。探偵にお金を払ってまでマチを探すのに、何の抵抗もない優しい人だった。

「ああマチ！ もうどこにも行かないで！」

「お母さん……」

真琴がくるまで、追川一家は家に入ろうとせず、ずっと外でマチの帰宅を喜んでいた。

血とかそういうものは関係なく、追川家は強い絆で結ばれているのではないだろうか。抱き合う家族の姿に、ぼくはそう思った。

「ラク」

控えめな声で、真琴がぼくを呼んだ。

追川家の感動の再会に水を差したくなかったのだからけど、マチが気づいて一声あげたので、すぐに見つかってしまった。

「結城さん！」

「あ……どうも」

真琴が会釈すると、鮮やかな色の髪が胸に零れ落ちる。服はやっぱりジャージだった。

「楽太郎くんが、マチを！」

真琴とぼくは、すこしバツの悪そうな顔をする。以前、これで依頼金を半分にされたことがあったのだ。

「楽太郎くんのぶんも、ちゃんとお礼します！ お茶でも飲んで待っててください！」

「いえ、今日のご家族でゆっくりされてください」

手招きされて戸惑うぼくを制し、真琴はまた頭を下げる。暗闇だから一見わからないけど、彼女は今すっぴんだ。光の下にはいきたくないのだろう。

「うちの探偵も、それを望んでいますから」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられながら、ぼくはうなずく。

「でも……」

「いいんです。では、後日あらためて」

「待って！」

立ち去ろうとするぼくらを引き止めたのは、マチだった。夫人の腕から抜け出し、ぼくにかげよってくる。

「どうもありがとう」

頬を寄せ、耳のすぐそばでささやかれる。

「ラクが探してくれてよかった」

そして、鼻にキスをした。

それを見て、真琴がにやりと笑う。追川夫人は驚く。追川さんは、ちよっと悔しそうだ。

びっくりしてかたまったぼくの背を叩いて、真琴は追川一家に向き直る。

「では、後日あらためて」

「はい、ありがとうございます」

何度も頭を下げる夫人たちに背を向け、真琴は歩き出す。そして、また振り向いた。

「追川さん、元気な赤ちゃん産んでくださいね」

「えっ……」

驚く夫人にかわって、マチが一声、にやあと鳴いた。

依頼を受けた日は、満月だった。だから今日は、ちょうど半月。比較的工作が早く終わったといえる。

月明かりと外灯の下、ぼくと真琴は並んで歩く。昼間のように目を気にすることもなく、自由に会話をしながら歩くことができるのは夜の特権だった。

「ラクはいつももてるのな」

先ほどのマチを思い出し、真琴が唇を曲げる。ぼくはそっぽを向いた。

「こういう搜索も得意だし、うちのナンバーワン探偵はラクだね、きつと」

どうやら一杯引つ掛けてきたらしい。かすかにアルコールのおいがする。悪酔いではないらしく、足取りは軽く楽しそうだ。

ほんのり頬を上気させる真琴は、初めて会ったときとあまり変わっていない。八頭身の体も長い足も背中を揺れる髪も、長年一緒にいる割に変化がない。

「ラク？」

立ち止まったぼくに、真琴が振り返った。

「疲れた？ どっかでジュースでも買おう？」

ぼくは、真琴が好きです。

「そーいやそろそろご飯なくなるな。仕事の金も入るし、たまには贅沢するか」

ぼくがどんなに言っても、真琴には聞こえない。彼女はただ、ぼくの頭を撫でるだけ。

「ラクもたまにはワンとか鳴かないと、なにかあったとき困るでしょ？ 無駄吠えされるよりはいいけどさ」

彼女はぼくの言葉がわからない。

だからぼくの想いは通じない。

真琴はぼくにリードをつけて歩かない。ちゃんと帰ってくるとわかっているから、一人で遊ばせてくれる。

でも、彼女にとって、ぼくはやはりただのゴールデンレトリバーなのだ。

「行くろう？ ラク」

歩き始めた背中を、じっと見つめる。彼女が空を見上げれば、ぼくもそれにならった。

そして、もう一度、真琴を見つめる。

彼女がぼくの言葉がわからないのなら、ぼくは一言だけ言い続ければいい。それ以外の言葉は一切口にしなければいい。

だからぼくは、真琴にこれしか言わない。

「いい月だね、ラク」

でも彼女には、一声鳴いたようにしか聞こえないのだ。

「真琴が好きです」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0982g/>

ワンサイド・デイズ

2010年10月8日15時55分発行